

2009年2月13日発行

# ぱ ろ す

四季の会・ユーザーズ・サービス

254号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 春寒の候、先生におかれましては益々御活躍のことと存じます。

この大変な時勢の中で、税理士を見極めていくべき時、私たちの価値観を高めることかと常に思うのです。会計事務所は人が中心です。お客様も人。所員も人です。人が中心、重要なことです。

「悪い会社はない。経営者に問題がある！」とか、「時勢のせいで潰れる会社はない。経営者に問題がある！」といわれます。「神の見えざる手」に導かれ、経営者も税理士も、自分の意思で会社をつくり、経営をするなら真剣に学び、努力し、人との出会い、価値観を高めていくべきかと思うのです。自分に与えられた役割を自覚して、自分のための自利と、他人のための利他とが一つになっていくような仕事、人生を目指していきたいと思うのです。

「致知3月号・特集賜生」で東井義雄著『自分を育てるのは自分』この本で東井さんが一貫して説いているのは賜生である。

今朝目が覚めてから何回呼吸したんですか。わからんくらい息してる・・・夜も、お昼も、日曜も祭日も、「どうかしっかり生きておくれよ、生きておくれよ」と、皆さんが寝ている最中も、皆さんのために働き続けてくれている「働き」があるんですね。

呼吸も心臓の鼓動も、自分の意志でしているわけではない。食べたものを消化、吸収し、不要なものを排除してくれる働きも、血液を全身に循環させる働きも、私たちの意志ではない。目に見えない偉大な働きによって、私たちの命はいまここにある。

そもそも、自分の意志でこの世に生まれてきた人は一人もいない。人は皆、何か知らない力によってこの世に生み出されてくる。賜った命であり、人生である。

この地上の生命は、人も動物も植物も、すべて細胞からできている。しかし、現代科学をもってしても、未だに一つの細胞も創り出すことはできない。遺伝子研究の第一人者、村上和雄教授によると、宇宙に細

胞が一個偶然に生まれる確率は、毎回宝くじを買って一億円が百万回連続当たるくらいのとんでもない希少さだという。そういう希少な細胞が60兆も集まり、調和しているのが私たちの生命なのである。

一つの感慨が浮かび上がってくる。「自分の体、自分の命は自分のもの」、と私たちは思っている。だが、すべては天地から借り受けたものなのだ、ということである。天地から借り受けたものならば、粗末にせず、その価値を十分に発揮させ、時期がきたらお返しする。それこそが天地の心にかなう生き方であろう。「神仏から喜んでもらえるほど心が育っているか。宇宙は限りないめぐみの海である。狭い利己主義の目では見えない」自分に与えられた役割を自覚して、自利利他の精神で仕事と人生を目指していきたいものです。

## 「ひらめき」は どこからくるのか！

自分の意志でこの世に生まれてきた人は一人もいない。人は皆、何か知らない力によってこの世に生み出されてくる。賜った命であり、仕事があり、人生があるのです。

だれでも「奇跡」の可能性を持って生まれてきているのです。遺伝子の研究に取り組み、遺伝子解読に成功、世界的業績を残した筑波大学名誉教授の村上和雄著の『生命の暗号』によれば、人間の60兆個の細胞から成り立ち、その細胞の核の中に遺伝子がある。遺伝子には「こういうときはこう働け、こういうときは眠っている！」という指令があり、それを遺伝子のON/OFFという。遺伝子ONの秘訣は物事をよいほうへ考えること、すなわちプラス発想である。人間の奇跡的な出来事も遺伝子の働きなしには起きない。

村上教授は、よい遺伝子を目覚めさせる方法にこんなことを話している。末期ガンを宣告された人が、モンブラン登頂に挑戦したら免疫力が上昇した。また、ガン患者に落語を聴かせ、大いに笑わせたあとで免疫力を測定したら、同様に上がったといえ、病気が改善に向かうことになるという。

T K Cの戦略経営者2月号に「飛耳長目」に書かれていたのが、**今、あらゆる分野で重要視される、「ひらめき」のことである。**

囲碁の総本山とも言える日本棋院の理事長に昨年末就任した大竹英雄名誉碁聖は48期もいろいろな碁のタイトルを獲得した一流棋士だが、9歳で神奈川県平塚市の木谷実道場に入った。大竹少年は仲間と一緒に毎朝碁を並べて古人や先輩の打ち方を学び、それから朝食をとって登校した。

冬に道場の廊下を雑巾がけして冷たい思いをしていると、それまで解決できなかった碁の問題局面が急にはっきりと浮かんできて、「ばあっと解ける」ことがあった。「なんていうかな、誰も見ていないところで努力していると、そういうことがあるんだ」と大竹理事長は朝日新聞紙上で語っている。

ノーベル賞の研究をやらせた1972年には32歳の京大助手だった増川敏英京都産業大教授は仲間だった28歳の小林誠助手と10年来の物理学の難問に取り組んでいたが解答を得ることができず刀折れ矢尽きた状態だった。考えに考えた増川さんは風呂につかりながら「どうしても駄目だ。明日は駄目だという論文を書こう」と決心して浴槽から立ち上がった瞬間に新しい発想に「気づいたとひらめきの情景」を語っている。

オワンクラゲの発光物質を探し出したかったノーベル化学賞の下村脩さんは、発光物質が発光すると壊れてしまうのに困っていた。だから光らないようにすれば抽出できることまでは分かったがその方法が分からなかった。一人でボートに乗ったり、家でも妻とほとんど口をきかずに考えたりする日が続いた。「あるときふと酸性・アルカリ性を調整することを思いつき、すぐに研究室に戻って試してみたら、光るのを止められた。その発見から発光を担うタンパク質が抽出できた。

これらは、遺伝子のON/OFFが関係していると思われる。よい遺伝子を目覚めさせるには、こんなことを実行するのがよいと考えられる。思い切って今の環境を変える 人との出会い、機会との遭遇を大切にすること どんときも明るく前向きに考える 感動する 感謝する 世のため人のためを考えて生きる。環境を変えると、体も心も新たな刺激を受けて眠っていた遺伝子が目覚める。心構えを変える、意識の変化が遺伝子のON/OFFにかかわる。だから環境と心構えが遺伝子をコントロールする2つの大きなカギといえる。

## 資金繰り難で、融資促進 -「決算診断」はますます生きる!!-

日経新聞に「中小企業の資金繰り難で融資促進、経営改善など柔軟に評価・・・金融機関に中小企業の実態を踏まえた融資判断の徹底を求め・・・」と昨今の厳しい時代に企業として金融機関に対して、どんなことが大切になるのか！会計事務所は、何を対応していくべきか！大事なことができます。

「銀行による融資先の信用格付け制度」が前提になります。金融庁の指導のもと、融資判断や自行の引当金の判断のために、「融資先を点数評価」し、「融資先の格付け」を行っています。「正常先」「要注意先」などの6段階の「債務者区分」の基になっています。

この区分をする際の視点は「点数化」されます。「定量分析」は決算書からの財務分析で「決算診断」をすることにより、「収益性」「安定性」「健全性」等、6要素が点数化していきます。「決算診断提案書」が効果的です。「定性分析」は計数化が難しい側面を点数化、「経営者自身の経営力」です。「マネージメント・パワー」が生きています。常々、経営者が自己と向かい合っていくことで効果的になるのです。「決算診断なくして経営なし」です。